

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	白石 哲郎（愛媛県）
学 位 の 種 類	博士（社会学）
学 位 記 番 号	甲第 3 2 号
学位授与の日付	平成 3 0 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	社会学理論における文化概念の変遷 —文化と社会の相互浸透をめぐるパー ンズ文化理論の今日的意義—
論 文 審 査 委 員	主査 千葉 芳夫（佛教大学教授） 副査 近藤 敏夫（佛教大学教授） 副査 辰巳 伸知（佛教大学教授）

### 〔 1 〕 論文の概要

本論文は、社会学における文化概念の変遷をたどり、その上で、文化についての社会学理論の新たな方向性を提示した意欲的な論考である。

主要な考察対象は、ドイツ文化社会学、T.パーソンズの機能主義社会学、文化論的転回である。文化論的転回や構築主義といった近年の人文・社会科学において有力となっている立場は、広い意味における文化（記号・言説など）が社会を構築すると見なすが、それでは社会のサブスタンシャルな根拠が見失われてしまい、文化決定論に陥ってしまう。

そこで、白石氏は、パーソンズ社会学の理論的展開に伴う文化概念の変化を丹念に跡づけ、社会と文化の「相互浸透」という中期パーソンズの視座が今日でも意義をもつものであると主張する。パーソンズも文化による社会の統合という文化決定論的傾向を強くもつが、中期の文化システム論においては、文化の下位システムと社会の下位システムとの間の「相互浸透」が理論化され、文化と社会との相互関係を詳細に分析しうる視座が示されているのである。

しかし、パーソンズ以降の社会学理論や文化理論の動向、およびグローバル化・脱領土化といった現代社会の変動を考慮するなら、パーソンズ社会学のような「統合モデル」は現代では有効性を持たない。そこで「闘争モデル」に基づく「文化の社会理論」を提示して、本論文は締めくくられている。

本論文は、序章および 5 つの章からなっている。序章では論文の全体的構成と上記のような執筆意図が述べられている。

第一章「ドイツ社会学における文化概念の特徴と限界」では、まず M.ウェーバーおよび G.ジンメル文化概念を取り上げ、文化が観念的要因（集合的な理念や精神）として捉えられるというドイツの特徴を指摘した後、A.ウェーバー、M.シェーラー、K.マンハイムの文化社会学の理論が考察されている。そして、ドイツ文化社会学が文化と社会との関係を観念的要因と実在的要因間の「協働制約的な相互関係」として考察したという点で、社会学における文化理論の先駆的業績と位置づけうるものであるが、「観念」および「実在」の両概念が明確には規定されず、また実体化される傾向があるという問題点が指摘されている。

第二章「機能主義的社会学における文化概念Ⅰ パーソンズ文化概念を特徴づける初期の統合的性格」および第三章「機能主義的社会学における文化概念Ⅱ 中期以降におけるパーソンズ文化概念の性質的変遷」では、パーソンズ理論の展開とそれに伴う文化概念の変化が考察される。

第二章では、1930年代の「主意主義的行為論」から'50年代初頭の初期の「社会システム論」に至るパーソンズ理論の展開と文化の概念が考察される。

まず、パーソンズの中心関心が社会の秩序維持にあったこと、この点において、社会の変動や変革に焦点が置かれたドイツ文化社会学とは性格が異なることが説明される。

次いで、社会の秩序維持という視点が、それ以前の機能主義、特に E.デュルケムの理論的影響を強く受けていることが指摘され、これまであまり検討されて来なかったデュルケムとの継承関係の考察が重要である、と主張される。

「主意主義的行為論」の文脈では、「共通価値による行為者の統合」という視座によって「秩序問題」の理論的解決が図られるのであるが、そこにはデュルケムの「道徳による社会統合」および「シンボリズム」の重要性という論点が受け継がれている。

'50年代初頭の社会システム論では、行為システムの下位システムとして、社会システム、文化システム、パーソナリティシステムが位置づけられる。そして、文化システムの要素である共通価値のパーソナリティシステムへの「内面化」および社会システムへの「制度化」によって、社会秩序の維持が説明される。それと共に、文化システムも「認識的記号体系」「表出的記号体系」「評価的記号体系」へと分析的に区分される。「価値」は「評価的記号体系」に属する「道徳的標準」であるが、それが「内面化」「制度化」されるには芸術などの「表出的記号体系」（シンボリズム）による媒介が重要と考えられる。

このように、パーソンズの社会秩序および文化の概念は、デュルケムからの理論的継承関係抜きには考えられないものである。

第三章では、AGIL 四機能図式から文化システム論を経てサイバネティック・ハイアラーキーを原理とする一般行為システム論へという、'50年代後半から'60年代後半にかけてのパーソンズ理論の展開と、そこにおける文化の性質的変遷が考察されている。

社会システムの機能要件分析から成立した AGIL 図式では、文化（価値）のⅠ次元における「制度化」とⅡ次元における「内面化」（「社会化」）およびⅡ次元における価値パターン維持が秩序維持メカニズムの中心に据えられる。

文化システム論においては、文化の下位システムが「経験的認知システム」「表出的システム」「評価的システム」「実存的システム」の四つに再構成され、それらの下位システムと社会の下位システムとの「境界相互交換」として文化システムと社会システムの価

値に媒介された「相互浸透」が考察される。

最晩年の一般行為システム論では、'50年代初頭の三分割モデルからそれに「行動有機体」を加えた四分割モデルに再編され、それをもとに「原始社会」から「中間社会」を経て「近代社会」へという社会の変動が考察される。

このようなシステム理論の展開に伴い、文化システムの性格も社会システムを秩序化する「規範主義的自律性」から、社会システムとの相互浸透関係にある「規範主義的相関性」、さらに社会システムを含む低次の行為システムを意味的に統御する「構成的自律性」へと変化している。

このようにパーソンズの理論は、初期の「主意主義的行為論」以来、文化（価値）を自律的なものと見なし、秩序形成・維持の中核に据える文化決定論的傾向を持つのであるが、唯一中期の「文化システム論」においてのみ文化と社会の相互関係の理論化がなされているのである。

第四章「文化論的転回と機能主義的社会学 パーソンズ以降の文化理論の一断面」では、文化論的転回と J.C.アレクサンダーの新機能主義を中心に、パーソンズ以降の文化理論の展開が考察される。

まず、マルクス主義や機能主義への批判として登場した文化論的転回に関しては、C.ギアーツの所論を中心にその方法論的、概念規定的、理論構成的特徴が説明され、解釈学的方法を特徴とするこの立場が、社会を根底的に成り立たせる内的な説明要因、さらに社会を能動的に再編する基盤として文化を捉えることから、その文化概念は「内的・動的な自律性」として特徴づけられる。これに対してパーソンズの機能主義的な文化概念の特徴は、社会システムの外部からそれを統合する「外的・静的な自律性」である。

次に、パーソンズの機能主義的システム理論を継承し、再構成しようとする新機能主義の代表者としてアレクサンダーが取り上げられる。特に文化の **Strong Program** と呼ばれる彼の文化理論が、パーソンズ流のシステム論的枠組みを放棄し、文化論的転回の特徴である、解釈学的・記号論的枠組みを積極的に導入するものであることが指摘され、このような解釈学的・構築主義的アプローチがパーソンズ以降の文化理論の趨勢となっていることが説明される。

第五章「中期におけるパーソンズ文化理論、その潜在的有効性 「文化の社会理論」の構築へ向けて」は、文化論的転回に代表される解釈学的な文化概念の問題性にも目を向け、それを克服する可能性を価値によって媒介される文化と社会の「相互浸透」という中期パーソンズの理論に求めている。

まず、文化論的転回に代表される解釈学的・記号論的潮流の理論的難点として、社会的な制度や行為などあらゆるものが「文化」に包摂され、「社会科学がその構造や因果連関を説明しようと努めてきた中心的なカテゴリーのいっさいが、広い意味で言語的に構築される存在にすぎない」とされ、「社会はそれ自体のサブスタンシャルな根拠を失ってしまうことになる」(p.116)ことが指摘される。近年では、こうした問題への対応として「物質論的転回」と呼ばれる理論的潮流も出現している。

文化に関するこのような理論状況を考えたとき、中期パーソンズの文化と社会の「相互浸透」という視点が現代でも有効性を持つと、氏は主張する。そしてそれは、①社会を「秩序化」する「相対的に安定したパターン」としての価値の基本的位置づけが担保されてい

ること、②文化と社会の相互作用を要素単位で多元的に分析するにあたり、両概念に「対等」な説明力を付与しただけでなく、互いに構制し構制されるという一連の過程そのものを「秩序化」する原理（媒介者）として価値概念を設定していること、という二点に集約されている。

だが、パーソンズ以降の文化理論の展開やグローバル化・脱領土化という現代社会の状況に鑑みた時、パーソンズの「統合モデル」はもはや有効性を失っているとされ、それに代わって「闘争モデル」に基づく文化についての一般理論（「文化の社会理論」）が提示される。

## 〔2〕 審査結果の要旨

本論文では、上記概要で名を記した以外に、A.コント、A.L.クローバー、P.A.ソローキン、A.シュッツといった社会学者、F.de ソシュール、L.ウィトゲンシュタイン、M.フーコーといった言語や言説の理論家、F.ジェイムソン、R.ロバートソンなどのポストモダニズムやグローバル化の研究者、その他にも多くの理論家・研究者が取り上げられている。

このことが示すように、社会学のみならず隣接学問領域にまで視野を広げ、人文・社会諸科学全体の理論的動向の内に社会学における文化概念の変遷を位置づけた点、および、グローバル化・脱領土化という現代社会の変容をも考慮した上で、「文化の社会理論」という新たな文化理論の方向性を提示した点は高く評価しうる。また、近年ではこのような通史的な学説研究はあまりなされていない。この意味でも、本論文は貴重な業績だと言える。

さらに、パーソンズの理論的展開と文化概念の性格の変遷を的確に整理し考察している点、なかでも、これまであまり検討されていなかったデュルケムとパーソンズの理論的継承関係を明確にしたこと、および中期における、価値に媒介された社会システムと文化システムとの「相互浸透」という理論の意義を示したことも、学説史や社会理論に関して氏が十分な研究能力を有していることを示している。

だが、本論文に問題がないわけではない。特に、氏の主張する中期パーソンズ理論の有効性を具体的にどのように示しうるのかということ、および統合モデルを基盤とするパーソンズ理論を闘争モデルにどのように接合しうるのか、といった点には、質問と批判が多く出された。

本論文でも指摘されているように、現代の社会学理論においては、文化が考察の中心に置かれる一方で、社会をどのように捉えるのか、ということが明確には理論化されない状況になっている。文化との関連を基軸とした社会学理論を志向するならば、文化と社会の関係をドイツ文化社会学よりも詳細に理論化しているパーソンズの「相互浸透」モデルに一定の有効性があるとする指摘は、頷けるものである。確かに、本論文では文化の社会理論の新たな方向性が示されているに過ぎないが、これは上に述べた現在の社会学理論が抱える難問と深く関わっていることであり、本論文の欠陥というよりは今後の研究の展開に期待すべきことであろう。

また、西洋の伝統的な思想においては、真、善、美が基本的な価値と考えられることが

多いが、パーソンズは価値を具体的には道徳的標準と捉えており、価値を狭く限定して捉えているのではないか。さらに、価値と規範の区別や記号と象徴の区別が曖昧ではないか、という点も指摘された。特に後者についてはデュルケムやパーソンズは象徴の持つ統合機能を重視しているが、象徴は対立・闘争の焦点にもなりうるということ、象徴より記号の方が共有性が高いと考えられるので、社会の形成・維持に関しては記号の方を重視すべきではないか、という指摘もなされた。

だが、これらのことはパーソンズ理論自体に内在する問題であり、これまた、今後の研究の展開の中で考察されるべき課題と考えるべきであろう。

さらに、最初にウェーバーの方法論が取り上げられているが、それよりも「理念」と「利害」の関係に関する彼のよく知られた見解を取り上げた方がよかったのではないか、という指摘もなされた。また、言語論的転回など、本論文が取り上げている諸理論に関して、理解が不十分と思われる箇所も見られた。

だが、これらの点は本論文の価値を大きく損なうものではない。

本論文にはこのような問題も残されてはいるが、何よりも、先に述べたように、広く文献を渉猟し、哲学をも含めた広い理論的動向の内に社会学における文化概念の変遷を位置づけ、またそれを現代社会の変動とも関連させて考察し、文化理論研究の新たな方向性を打ち出していることは高く評価しうるものである。

よって、本論文は博士（社会学）の学位を授与するに相応しいと判断する。